１．葛城の名石の見所

久米の岩橋のまわりに鍋釜石、鉾立石、胎内潜りの三つ大きな岩と、岩橋の傍に石不動があって河内名所図会(1801)に葛城山の項目で「葛城岩橋圖」としてその分布図、詳細図つきで紹介されています。久米の岩橋については役行者との関わり合いが解説されています。役行者があってこその名所と考えられます。

役行者は今では伝説上の人物とされていてその存在さえ疑われているのですが,634年に生まれて703年(701年とも？)に亡くなるまで奇想天外な一生を送りました。

続日本記(797)では役君小角(ｴﾝﾉｷﾐｵｽﾞﾂﾞﾇ)、日本霊異記(822)では役優婆塞(ｴﾝﾉｳﾊﾞｿｸ)、賀茂役君(ｶﾓﾉｴﾉｷﾐ)と呼ばれ、ほかに役行者は平安時代に入ってからの呼び名です。

役行者は、土地持ち、それに租税の取り立てや役民(ｴﾀﾞﾁﾉﾀﾐ)と言って宮殿や陵墓の建設に駆り出された人々を司るなど、公的に奉仕する立場にあったことがその名に「役」が付いているところから判るそうです。

時代背景としては世の中、生活に苦しんでいました。

11才(645)で乙巳の変、大化の改新。蘇我家が滅びて領地の人は奴隷同然。斉明天皇は宮殿を三度も。唐、新羅に亡ぼされても復興を願う百済遺民の百済復興運動に応じて1000隻の船団を組んで乗り付け400隻を焼かれて惨敗となった白村江(ﾊｸｽｷｴ)の海戦(663)。亡命する百済の人を養い優遇。みーんな国民の負担です。

役民として駆り出され、税の取り立ては厳しく、払えなければ金剛、葛城、箕面、生駒、大峰の山中へ亡命をよぎなくされました。

苦しい生活を強いられる人々を仏様の道へ導こうという考えを役行者は一生貫きました。

しかし妬む人もいて、例えば日本霊異記では、河内名所図会に載っていますが役行者の命令通りに吉野の金峰山へ橋を架けられなかったことで谷底に幽閉された一言主神が讒言したとなっています。ご参考までに続日本紀は小角を師とする韓国広足の讒言としています。

この河内名所図会を下さったのは葛城修験道の山伏でもある萩原真次郎さんで、残念ながら2013年に104才で亡くなられました。他にも葛嶺雑記(1852)、日本名勝地誌(1893)など数多くの研究史料をいただき、山中でも勉強させてもらいました。師匠と仰ぐ方です。

萩原さんは住友山岳会の「近畿の山と谷」（1932）を住友銀行の友人からもらい受けました。その中に「葛城に名石があるが所在不明」と書かれているのを読み、河内名所図会が手元にあるから探してみようと思い付きました。

まず石不動を見つけるとすぐそばにある久米の岩橋がありました。続いて鍋釜、鉾立、胎内潜りを見つけました。見つけては写真を撮って地元の方の鑑定を受け、この分布を仲西政一郎氏の昭文社エアリアマップ「葛城高原二上山」に載せ、大勢の人が訪ねることが出来るようになりました。

２．布施城跡

本丸跡は標高約470m。尾根が段々畑のような形で東北東に延びていて途中420mほどのところで東へ延びる支尾根も含めて主脈の約350ｍまでが連廓式城郭と呼ばれています。

新庄町史によると、布施一族は鎌倉幕府滅亡(1333)後に今の葛城市新庄町で頭角を現わし1400年、1500年代に華々しく活動しました。1466年には畠山政長、義就兄弟の抗争の余波で大きな損害を受け、1556年に河内の安見通政,1569年には織田信長に攻め込まれ、この後布施一族は急坂を転げ落ちるように衰亡しました。

周りは深い谷に囲まれ、いかにも難攻不落の山城です。

添付の河内名所図会と一緒にサァーｯと斜め読みしておいていただくと有難いです。

しっかりお読みいただくと、山行の楽しさは二倍です。　　2015年11月3日　　　根来春樹